

ニュースレター第43号をお届けいたします。今号は樋野先生とスタッフの増田が担当します。

『愛する人』 ～ 心強き人 ～

樋野興夫（順天堂大学名誉教授、新渡戸稲造記念センター長）



2026年7月11日 150回【お茶の水メディカル・カフェ in お茶の水クリスチャン・センター（OCC）】に赴いた。筆者は、別室で3組の個人面談の機会が与えられた。川崎市から参加された方は『がん哲学外来・カフェ』を開設されることであろう。今朝、芹洋子の『四季の歌』を拝聴したので、7月は夏の始まりであるので『夏を愛する人は心強き人 岩を砕く波のような 僕の父親』を紹介した。

筆者の父【樋野廉平(1921年1月24日～2013年5月5日)】&母【樋野壽子(1923年2月20日～2019年6月3日)】は、【現在では人口約30名、60%の空き家の故郷】の島根県出雲市大社町鶴峠（うど）の自宅で、安らかに 92歳・96歳の天寿を全うした。葬儀では、筆者は喪主として『天寿を全うし、地上の長い旅路を歩み、様々の責任を全うした両親には、深い敬意を払います』と挨拶をしたのが鮮明に思い出された。『地上では、故人の遺志を受け継ぎ 天国ではカフェを開催する』のが、筆者の大きな夢である。

父は婿養子で、貨物船やタンカーの機関長であった。母の兄達は、太平洋戦争で戦死し、末っ子の母が家を継いだ。そして、祖父の樋野卓郎(1888-1972)から家を継いだ末娘（母）の3人の子供（誉・誠・興夫）の末っ子の長男：筆者に『家を興（おこ）す = 樋野興夫 = ひのおきお = Origin of Fire』と命名されたと、膝に抱かれて聞かされた『幼年時代の思い出』が鮮明に蘇った。

『興＝国を興す 産業を興す 振興 興起 興隆 再興 復興』とのことである。

筆者は、小学生、中学生時代の夏休み、母と父の船に乗り、日本海、太平洋の船旅をしたものである。

（次ページへ続く）



(前ページよりの続き)

【鵜峠+鷺浦(さぎうら)=鵜鷺(うさぎ) 小学校、中学校】は、既に廃校になった。故郷は無医村であり、幼年期、熱を出しては母に背負われて、峠のトンネルを通過して、隣の村(鷺浦)の診療所に行った体験が、今でも脳裏に焼き付いている。筆者は『人生3歳にして医者になろう』と思ったようである。

終了後、戸田裕子様から『OCCニューズレター第43号』の原稿を依頼された。2027年は15周年記念シンポジウムが企画されるようである。大いに感服する。



メディカル・カフェに参加してくださる方々には様々な方が集っています。がんが見つかって治療を始めたばかりの方もいれば、がんの治療が一通り終わって数年が経過した方や家族ががん患者の方などがいらっしゃいます。

初めてメディカル・カフェに来た多くの方々は、がんと言う古くからの怖いイメージから大きな不安を抱えて来られます。お茶の水メディカルでは、その大きな不安を抱えた方と樋野興夫先生が個人面談を受けることが出来るのが素晴らしい所で特別な場所だと思います。樋野先生は参加者の方とメディカル・カフェの面談では治療の具体的な方法について話すわけではありません。樋野先生は「病気であっても病人ではない」などの言葉を通してその人らしい生き方の探求をするように勧めたり、病気に支配されない明るく前向きに生きることを勧めたりと、樋野先生のおっしゃる「言葉の処方箋」として勧めてくださっていると思います。ここでは詳しく書けませんが、是非、樋野興夫先生の著書をお読み頂ければと思います。

また、樋野先生は多くの方々と面談された後、「是非、あなたもメディカル・カフェを開いてください。」とお話しておられるようです。この発言を聞いたスタッフは“先生、また言っている”と顔を見合わせてしまいますが、この言葉の内には、がん患者の皆さんに生きるための希望を与えているのだと思います。樋野先生のやさしさから発せられる言葉なのだと思います。

そして、多くのスタッフの方々ががんと言う病気と戦った経験を持っておられたり、がん真剣に向き合っていたりした経験を通して生きることの素晴らしさを、今がん苦しんでいる方々に伝えたいとメディカル・カフェに集っているのだと思います。がん苦しむ方々が、お茶の水メディカル・カフェにお出でいただき、少しでもその重荷を下ろすひと時となったらと思います。

お茶の水がん哲学外来・メディカル・カフェ in OCC スタッフ 増田 謙

